



【2016-08-03】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、
人生を味わう

今週は、本の紹介です。

新将命（著）「一流の指導
者」から学ぶ原理原則

長野修二

仕事をおこなっていくうえで読んでおいたほうがよいと思う書籍を尋ねられたら、迷わず新将命（著）「[一流の指導者](#)」を推薦します。

理由は、人がビジネスをおこなううえでの前提条件についてわかりやすく簡潔にまとめられているからです。

かなり古い書籍ですが、私には今だこれ以上にわかりやすく実践的に書かれているものはないと思っています。

何度も読み返していましたが、今また読み直していますが、仕事（人）の原理原則がコンパクトに詰まっています。

タイトルは、「一流の指導者」となっていますが、むしろプロローグのタイトルである「才と徳のリーダー学」のほうがわかりやすいのかもわかりません。

時代時代で常にリーダーの必要性が叫ばれますが、リーダーは育成できるのでしょうか。

答えは、著者である新将命氏が言うように育成はできないでしょう。

それでもリーダーが必要であり、リーダーとはどのような人物なのかをビジネスの視点を通して語っています。

この本は読めば読むほど現実のむなしさを感じるようになりますが、それでもあきらめず「リーダー」を目指す人には参考になると考えています。

しかも、スキルではありませんから生涯をかけて挑戦することになるでしょう。

その点では、若いうちに読んでおいたほうがよいでしょう。

さらに仕事の実践を通じて何度も読み返してみることをお勧めします。

新将命氏は、シェル石油株式会社、日本コカ・コーラ株式会社、ジョンソン・エンドジョンソン株式会社等で仕事をされています。

近年も多くのビジネス書を出されていますが、「一流の指導者」は、仕事（人）の原理原則を学ぶには最高の書物だと思います。

この書籍は1992年に出版されていますが、原理原則だけが述べられていますので古さはまったく感じないでしょうし、むしろ現在は、私がこの本を読んだ1994年ごろよりも、さらにこの本の内容を学ばなければならい時代になっている、と考えています。

一時書籍をみつけるのが大変だったようですが、現在は電子書籍化されていますので簡単に入手できます。

新将命（著） 「[一流の指導者](#)」



本を読めば職場のギャップを直截的に感じるでしょうが、それでも私も挑戦の連続でしたし、今だむずかしい状況ではありますが、誰かが変えるのではなく、自らが変えるという覚悟をもたせてもらった本でしょうか。

人生とは、ビジネスに限らず多くの学びの連続作業になるのかもわかりません。

【参考資料】

PRESIDENT Online

2016年5月26日（木）

[数字センスを磨く“5つの鍵”の抜粋](#)

上に立つ人材は数字だけで読めない

人の能力はある程度のポジションまでは数字で読めるが、それ以上はわからないと古森会長はいう。

それは求められるものが違って来るからだろう。

若手部長までは、見た目の印象や、発言の内容、考え方など顕在情報あるいは断片情報でその人の優秀さがわかる。営業の成績や仕事の出来具合といったものも顕在情報の一つだ。けれども、部長

以上で成長する人材はそれだけではわからない。部長から先は、歴史とか文学などの教

養、要するにリベラルアーツを身につけ、大局観を持っていないと伸びない。

歴史観や大局観、それに加えて志と体力がないと、部長になった途端、「この役職で十分」とそのポジションに安住してしまう。本来なら、そこから大きく伸びなければいけないのだろうが、人間としてのスケールが小さいため、それ以上成長できないのだ。

人間を業績などの数字で測れるのは初任部長まで。それ以上は数字では見えない世界ということだろう。

富士フイルムホールディングス代表取締役会長兼CEO 古森重隆